

「オリジナル盤」を巡る神話

— 価値形成の分析と仏教的省察 —

The Myth of Original Press:

Consideration of its Value Formation and Reflection from the view point of Buddhism

横 川 潤*

Jun Yokokawa

In these days, analog record, or vinyl, has been popular among music fan in Japan. The interest feature is that big fans of vinyl often seek for Original press so eagerly. The purpose of this paper is to consider the reason of their enthusiasm for Original press and examine its cases. As an example, the case of Beatles is examined and the idea that strong favoritism, that is somewhat resemble to religiousness, toward Original press is under the charisma of the musician is presented.

At last, ethical matters are discussed from the view point of Buddhism. The excessive enthusiasm toward Original record or collecting records sometimes lead people to unethical mental condition. It is not necessarily to say wrong to collect records but fans should know the risk and set the limit for their desire.

1. アナログレコード人気とコアマーケット

アナログレコード（以下レコードと略す）の人气が高まっている。日本レコード協会（東京・港）によれば2011年のレコード生産数量は21万枚で前年比でほぼ2倍の増を記録。生産額は同97%増の3億3600万円。2012年1～6月の数量も前年同期比51%増と増加傾向が続き、結果として前年比ほぼ2倍の42万枚、売上高にして6億円強を販売した。

このうち「洋盤」と呼ばれる海外のレコード会社に所属するロックやジャズのレコードは、ビートルズの復刻版アルバム発売等の効果で、前年対比約3倍に当たる24万2000枚に上った。未だ小規模は小さいとはいえ、CDや音楽配信の市場は1998年の6074億円をピークとして減少傾向が続き、現在はその半分程度の規模しかない。そこでレコード市場は根強いファンが支える手堅

い市場として音楽業界の注目を集めている*1。

インターネットオークションサイト「ヤフオーク！」のレコード出品数は約34万点で、大半が廃盤ゆえ新規購入の難しい特殊性はあるにせよ、同約80万点のCDに対して遜色のない存在感を示している。高価なレコードには数百万円の高値がつき、中古レコード販売「ディスク・ユニオン」では高額商品の売れ行きが順調という。

同社はEMIミュージック・ジャパンと共同で名門ジャズレーベル「ブルーノート」の名盤復刻を行い、計5回のイベントで限定生産の5千枚をほぼ完売。この企画が奏功して2012上半期の来店客数は前年同期比で1割の増を記録。ディスクユニオンの塙耕記は「若いときにレコードを集めて、しばらく離れていたという団塊の世代の来店が目立つ」という*2。

本稿ではこの様なブームの渦中にあるレコー

* 文教大学国際学部准教授

*1 NHKかぶんブログ, 2013, <http://www9.nhk.or.jp/kabun-blog/700/142367.html> (参照2013-10-8)

*2 日経MJ, 2012, 年7月30日付, レコード回帰、アナログ感共鳴——ジャケットに愛着も (ブームの予感)

ドに着目し、その人気を支えるコアマーケットの特性を分析する。昨今のレコードブームを支えるコアマーケットは依然としてレコードマニアと考えられる。

レコード蒐集家向け専門誌としては、1982年創刊の月刊『レコード・コレクター（通称レココレ）』（株）ミュージックマガジン』の活動が目覚ましい。CDの台頭と全盛、ネット配信音楽の興隆をよそにその発行部数は公称10万部に達し、長期低迷に苦しむ雑誌業界で大いに気を吐いている。レコード販売業では前述の「ディスク・ユニオン」が1941年創業という老舗で、「ロック館」「プログレッシヴ・ロック館」「ジャズ館」「クラシック館」「SOUL/BLUES館」「クラブミュージックSHOP」「PUNK MARKET」「HEAVY METAL館」などジャンル別に細分化された店舗を擁し、姉妹店の「オーディオユニオン」や「レコードアクセサリ館」ではレコード関係のオーディオ機器を扱っている。

この様な専門雑誌や専門店の存在に、一時は衰退商品と目されたレコードへの一貫して根強い支持が窺え、その周辺に新たな顧客層の流れ込む構図が読める。そしてマニアの世界のご多分に漏れず、神話と象徴、信仰のダイナミズムが透けて見える。

コアマーケットの消費性向では殊に「オリジナル盤志向」が顕著な傾向として認められ、マーケティング的な考察として極めて興味深い。

本稿ではレコードブームの本質を見抜き、その行方を占うべく、初版信仰をテーマとして検討を進めていく。すなわちオリジナル盤の条件とコアマーケットにとっての価値、それらを意味づける神話（ストーリー）の実例と構造を吟味する。強いていえば消費者行動研究の記号論アプローチといえ、包括的フレームワークの補完および倫理的考察（省察）として仏教アプローチを試みて本稿の結びとする。

2. 神話とカリスマ

オリジナル盤信仰はカリスマの存在とその神

話を基盤としている。カリスマはヴェーバー（Weber, M.）が科学概念として普遍化した語で、情動的帰依によって成り立つ支配の根拠である。彼によれば人をカリスマたらしめる源泉は「奇跡・勝利・成功」とされる。

ビートルズはギネスブックが世界一成功したグループミュージシャンと認定し、人気と実績の両面で他の追随を許さぬ存在たることは論を待たない。2009年には英国盤全14作がCDとしてリマスターされ、発売後わずか7ヶ月で1,700万枚のセールスを記録。2012年11月14日には英国盤全14作のステレオ版レコードが発売され、翌2013年には同14作のモノラル版の発売が続いた。またオークションの高額レコード商品群では彼らの人気アルバムやシングルが名を連ね、ビートルズはレコードを語る上で最も重要なミュージシャンである。

ビートルズは楽曲の比類なき革新性と際だった商業的成功で狂信的ともいえるファン（ビートルマニア=信者）を獲得し、カリスマ（教祖）として揺るぎない地位を築いた。

ビートルズの活動は1962年～1970年の8年に過ぎなかったが、その間ジョン・レノンのキリスト発言や平和運動、事実無根のポール・マッカートニー死亡説などが世界的な話題となった。グループ解散後は1980年のジョン・レノン射殺事件が全世界を揺るがし、他のメンバーの動静も常に注目の的となった。グループが結成されて50年が経った現在、「神話」の数とバラエティにおいて別格の存在といえる。

あまたの「ストーリー（神話）」は様々な「ブランド（象徴）」と「ロイヤルティ（信仰）」を大量生産し、しばしば商品に付加価値を生じせしめた。そしてビートルズのレコードにおける初版信仰をいやが上にも高めていった。そもそもコアマーケットの世界では一般に初版を尊ぶオリジナル信仰が根強い。愛書家が初版の狩猟を行う趣味とも似た非合理的（それゆえ神話的、信仰的）な側面を持つ一方、いちおうの科学的な論拠も見出しうる。

3. オリジナル盤とは

コマーケットではビートルズのレコードの価値を見定める場合、まずマトリクス・ナンバーを議論の俎上に乗せる。一般にレコード・レーベル付近の非録音部には版数を示すナンバーが彫られている。初版では概ね、カットイング・エンジニア、レコーディング・ディレクター、プロデューサー、アーティストの意見が反映され、論理的には彼らの意図が如実に反映されたレコードと考えられる。

レコードの製造ではまずマスターテープの録音をカットイング・マシンでラッカー盤に刻む。カットイングの段階で音の歪みを調整し、ラッカー盤にニッケルのメッキ処理を施して剥離する。完成したマスター盤（音溝は凸）の番号が「マトリクス」で、この原盤にメッキ処理をし、剥がしたものが「マザー盤（音溝は凹）」。再び音の確認を済ませたマザー盤で、レコードプレスのための「スタンパー盤（音溝は凸）」を起こす。レーベルでペレットと呼ばれる塩化ビニールを挟み、スタンパー盤で100～150KG/cm²の圧力でプレスする。1枚のスタンパー盤でプレス可能なレコードは2000枚程度で、それ以上の枚数を製造する場合は再びマザー盤からスタンパー盤を起こす。

1枚のマスター盤より製造されるレコード（初版＝1st pressing）は数万～20万枚とされ、それ以上の製造にあたっては2版目、3版目のラッカー盤が作られる。以上をまとめればラッカー盤→マザー盤→スタンパー盤という枝分かれとなる。

試みにキング・クリムゾンのレコード（King Crimson / In the Court of Crimson King）を見れば、「Islan ILPS 9111」というカタログナンバーに続き、マトリクス・ナンバーが付与される。現時点の日本で流通しているマトリクスナンバーは、[ILPS9111A▽2 / ILPS9111 B//2]

[ILPS9111A▽2 / ILPS9111 B//3] [ILPS9111+A2 / ILPS 9111+B3] [ILPS9111A-4U/ ILPS B-4U] とされる*³。マトリクス・ナンバーは当然「1（最初のマザー盤）」から始まるが、1回目ではOKが出なければキングクリムゾンの様にA▽2 B//2がオリジナル初版となる。

実際にA▽2 B//2の音質は格別とされ、日本のオークションでは10万円超～数万円の高値がつき、他のマトリクス・ナンバー盤を圧倒的に引き離している。一方でアメリカのオークションでは数点のA//1 B//1の出品を見、[ILPS9111A//1 -111/ ILPS9111B//1-112] の落札価格は実に3466.74ドル。[A▽2 B//2] のマトリクスナンバー盤は日本同様1,000ドル超～数百ドルの高値で落札されている。両面マトリクス1はその常軌を逸した希少性（世界で数十枚程度）ゆえ、一部のマニアの間でテスト用プレス説が囁かれている。

さてマザー盤より起こされたスタンパー盤の表記はレコード会社つづに違い、ビートルズのレコードを製造したEMIでは、「GRAMOPH LTD」の順で、最初のスタンパー盤で作られたレコードは「G」、2枚目ならば「R」。12枚目のスタンパー盤は「GR」と表記され、「マザー1スタンパーG」が求極のオリジナルとなる。

マザーおよびスタンパーナンバーはしばしば判別し難い上、ナンバリング自体の厳密性には疑問が残るとはいえ、たとえば生産数の圧倒的に少ないジャズの場合と比較すれば相対的に整備されている。ジャズではたとえばDG（Deep Groove＝深溝）の有無がオリジナルの判別材料となる。1950年代以前のレコードプレス製法ではレーベルに深い溝の出来る事があるため、1950年代後半～1960年代前半のモダンジャズ全盛期に録音されたレコードに関して生産時期の推定材料となる。

ジャズではビル・エヴァンス（Evans, B.）のレコードが高値を付け、殊に1959年～1961年を活動

*3 CARMEN Dancing On A cold Wind, マトリクス・マザー・スタンパー,
http://music.geocities.jp/carmen_slrz1040/page027016.html (参照2013-10-8)

期間とするビル・エヴァンス・トリオ (Bill Evans Trio) 時代の初版レコードは相当の高額で取引される。ビル・エヴァンス・トリオによる「Portrait in Jazz」Explorations」「Waltz for Debby」および同日収録の「Sunday at Village Vanguard」の4作は「リバーサイド四部作」と称され、DGの有無が落札価格に多大の影響を与える。就中「Sunday at Village Vanguard」はDGアリ盤が極めて稀少のため、ほぼ同時期のDGナシと比較して数倍(1000ドル以上)の高値がつく。

当時ビル・エヴァンス・トリオのレコードを製造販売していたのはリバーサイド (River Side) で、同社のレーベルはモノラルの場合、1956年～1963年(ないし1964年)まで青地のセンターレーベルでシルバーのマイクとリールのロゴがトップに入っている。ステレオの場合は1958年～1963年(ないしは64年)まで黒地のセンターレーベルで、モノラル同様トップにシルバーのマイクとリールのロゴが入る。そして1965後期～1966年前期はモノラルとステレオのセンターレーベルがシンプルな青地のデザイン(マイクとリールのロゴなし)で統一されている。

従ってリバーサイド四部作のオリジナル判別基準は、DGの有無およびレーベルの色とデザインである。更にレーベルの大きさが細かい時代認定の決め手となる。リバーサイドではレコードに番号を付与し、たとえば「Portrait in Jazz」は「RLP12-315」で「12インチレコードの254番」の意。244～278番のモノラルが「青の大ラベル(通称青大)」DG(243番まではホワイト・レーベル)で、279～330番台は「青の小ラベル(通称青小)」のDG。そして340番～は「青の大ラベル(通称青大)」に変わる。244～278番の青大と340番～の青大は溝の輪の大きさと判別される(前者の方が小さい)^{*4}。

そこで279～330番台の「Portrait in Jazz (315番)」では青小がオリジナルの証といえ、実際に

青大と比較して非常な高値を付けている。

ジャズ界の大物といえばマイルス・デイビス (Davis, M.) だが、彼の代表作「Kind of Blue (1959年リリース)」は1千万枚以上を売り上げた大ロングセラーアルバムゆえ、様々なオリジナルの鑑別法が見られる。版元はコロムビア (Columbia) で、1955～1961年のレーベルはホワイト6アイ (eye) と称される。eyeとは親会社で報道機関であるCBSのトレードマーク(大きな目に足のついた函柄=報道機関の象徴)で、6のeyeがレーベルの同心円状に並ぶため6アイの愛称がついた。そこで6アイのレーベルは「Kind of Blue (1959年リリース)」オリジナル盤の一条件となる。ただし1961～1962年の間はCOLUMBIAの文字の下にCBSの小さい黒文字がプリントされ、このレーベルは必然的に2ndプレス以降と分かる。

また1959年8月発売のレーベルではSide 2の曲順にミスプリントが見られ、10月の追加プレスで訂正されたため、前述のDG等に加えてオリジナル判別の有力証拠となる。

なお「Kind of Blue」のオリジナルはモノラル盤とステレオ盤の2種で、本国アメリカではステレオ版がハイエンドオーディオ誌『The Absolute Sound』のSuper Disc List "Best Of Bunch"に選定されたため人気が高い。ビートルズのレコードではモノラルとステレオの問題は大きくクローズアップされるため、後の項で詳しく扱っていく。

「Kind of Blue」で千ドルを超える最高値がつくのは「プロモーション盤(通称プロモ盤)」といわれるホワイトレーベルである。プロモ盤はテレビやラジオなどの放送局、音楽評論家、小売店等に送られる見本盤ゆえ一般に高音質とされる。「Kind of Blue」に限らずプロモ盤には通常版を遙かに上回る高値がつく。

しかしプロモ盤は原則的として売買禁止(not

*4 レコマ君のジャズレコード独り言、第37回目「リバーサイドレーベルのこと 2回目」、2006。
<http://www.hifido.co.jp/merumaga/fukunami/061020/index.html> (参照2013-10-8)

for sale)で、おおむねその旨がジャケット等に明記されている。アメリカの判例ではプロモ盤は社会通念上プレゼントと考えられ、その売買に違法性はないと認められている。

そのため国内外のオークションではプロモ盤が堂々と出品リストに名を連ねているが、社団法人日本レコード協会は市場価格の混乱を危惧してか、その所有権はレコード会社に帰すとして売買を禁じている。

4. ビートルズとオリジナル神話

さてビートルズのレコードはひときわ神話性を帯びている。単なるオリジナル尊重の域を超えてストーリー(神話)が存在し、新たなブランド(象徴)とロイヤルティ(信仰)を生じせしめている。以下にその詳細を検討していく。

A) Loud Cut (「Rubber Soul」モノラル盤)

アルバム「Rubber Soul」のマトリクス1はLoud(ラウド=大音量)カットと呼ばれる。ビートルズの録音はこのアルバム以来コンプレッサーで音に人工的处理を施す手法に傾き、音圧の高さで迫力を生むサウンドになったとされる。マトリクス1はラウドに過ぎるため1度は不採用が決まったものの、おそらくは需要に間に合わせるためプレスに回された。^{*5}内周部が歪むとされ、A面最後の曲(ミッシェル)に影響の出ることが多い。

ラウドカットは音質面の魅力に加え、ビートルズの音楽的進化やストーリー(神話)を味わえるがゆえ人気が高いといえ、実際にそれ以外の盤に比較して高値で取引される。なお湯浅学によれば音のバランスとして最優秀なのはマトリクス5/5の由。

B) 「Withdrawn Press (「Revolver」モノラル盤)」

オリジナル盤はマトリクス1/2で、プレス初日にB面7曲目(Tomorrow Never Knows)の差し替え(Withdrawn)が決まったため、市場に出

回った数は多くないとされる。ラバーソウルのオリジナル盤と同じくラウド気味ゆえ、鮮烈で迫力あるサウンドといえる。またTomorrow Never Knowsの差し替えられたバージョンはオリジナル盤でしか聴けぬという希少価値を有する。しかし湯浅によればB面のマトリクス3は解像度に優れ、ラバーソウルのマトリクス5/5に近いスタンスという。すなわちワインデイ・プレスの価値とは、必ずしも音質を第一義とせぬ神話的な性格といえる。なおオリジナル盤を始めとしてモノラル盤はステレオ盤とテイクが異なるため、ステレオ盤になれた大半の聴き手には新鮮に響く。

C) Wide Spine (「SGT Pepper's Lonely Hearts Club Band」モノラル盤)

Wide Spine(ワイドスパイン)は背の幅が広いレコードジャケットの意で、一説にポール・マッカートニー(McCartney, P.)の「薄っぺらなジャケットは嫌だ」という発言に基づいて作られた。ワイドスパインは最初期盤を示す符号といえる一方、ビートルズ神話の象徴と他ならない。

またリボルバーと同じくオリジナルはモノラル盤で、一説にビートルズのメンバーおよびプロデューサーのジョージ・マーティンは、録音に当たってモノラルでの観賞を念頭に置いていた。そこでマニアは彼らの純粋な意図を組むべく、オリジナル盤を始めとしたモノラル版レコードの鑑賞に傾いたという理屈は成り立つ。

D) Double Misprints (「Hey Jude」ステレオ盤)

アルバム「Hey Jude」はアメリカ編集版ゆえオリジナル盤はアメリカのレコードだが、イギリスで対アメリカ輸出用にプレスされた少数のレコードが存在する。その初期版ではレーベルに2カ所の誤植(Paperback Writer→Paper Back Writer, Revolution→Revolutions)が認められ、短期間で修正版に切り替えられた。その

*5 湯浅学, 2012. アナログ・ミステリー・ツアー 世界のビートルズ1962-1966, 青林工藝舎, P162 ビートルズの神話に關しては本書を参照した。

ためごく僅かのレコードがDouble Misprintsと称され、著しく高いプレミアがついている。国内で大量生産されたイギリス編終盤と比較して、スタンパーの数が少ないため音質はよいと推測されるが、第一義的価値は疑いなくその神話性に存する。

E) Left Apple (「Abbey Road」)

オリジナルはマトリクス2/1。その初期盤はジャケット写真の引き伸ばし率の関係で、リンゴのマークの位置がその後のレコードと比較して左側に位置し (=Left Apple)、レーベル上にあるべき「Her Majesty」が無表記といったマニア心をくすぐる特徴のためプレミアがつく。アビーロードは大量生産のせいかプレミア額は一定幅に収まるが、初期録音盤の証左と神話性の結びついた好例といえる。

F) Gold Parlophone (「Please Please Me」)

デビューアルバム「Please Please Me」のGold Parlophoneはビートルズの全アルバム中で最高値群に位置づけられる。パロフォンはビートルズが所属した英国コロンビア (現EMI) のレーベルである。

その希少性の由来は1963年3月発売のGold Parlophoneレーベルが同年の夏にはその後の主流となるイエロー/ブラック (Y/B) パロフォンに切り替わった事である。また漆黒に金文字という組み合わせの美やずりとした重量感は、「神話の誕生」というにふさわしい価値を生む。音質でいえばA面1曲目の「乾いたハンドクラップはこの盤でしか味わえない」が、そのビジュアル的な印象が神話性を促した証左といえる。

5. オリジナル信仰の仏教的解析および省察

以上の様にオリジナル盤を巡っては様々な神話と象徴、そして信仰の存在が見てとれる。最後にオリジナル信仰を支える心理的要因について仏教的な解析を試み、結びに代えてその省察を行っていく。

オリジナル盤に対するニーズの合理的根拠は第一にその音質で、既述の様にラッカー盤・マ

ザー盤・スタンパー盤の若い方が論理的には高音質といえる。

たとえばビートルズのレコードでは1982年に発売されたMFSLの存在が知られる。英国編集盤全13アルバムをリマスターしたMFSL (モービル・フィディリティ・サウンド・ラボ) の存在が知られている。オリジナルのマスターテープからハーフスピードでダイレクトカッティングされたラッカー盤を用い、日本ビクターのプレス工場ですーパヴァイナルという最高級の塩化ビニール素材にプレスされたレコードである。科学的にはオリジナルに劣らぬ高音質の筈だが、カッティングにおける技術やセンスの問題、あるいはオリジナルテープの経時劣化のため一般的にオリジナルの持つ音圧や鮮烈さには乏しい。

とはいえ「何を以て高音質とするか」という問題は「何を以て美味とするか」さらには「何を以て幸福とするか」という主題と似て主観性と切り離せない。たとえばボストンなどアメリカ東海岸のスピーカーは歴史的に「カマボコ特性」と俗称され、その周波数がカマボコの断面の様に中央をピークとして両端がなだらかに落ちている。すなわちボーカルの様な中音に重点を置き、打楽器等の高音やベース等の低音が過ぎぬ設計となっている。一方でイギリスのスピーカーはむしろ高音域重視型とされ、この音質的な対照はイギリスのビートルズやクイーン (Queen) とアメリカのイーグルス (Eagles) やビリー・ジョエル (Billy Joel) 等、一般になじみの深いミュージシャンの印象と齟齬がない。

たとえば1951年にフルトヴェングラーがバイロイト音楽祭で指揮したベートーヴェンの第9交響曲は、オリジナル盤で音質の差が価値を決める例証といえる。名演として名高いためオリジナル盤には非常な高値がつくが、本家ドイツ版オリジナル盤 (WALP) はその重厚な音質ゆえ鮮明さに乏しく、クリアな音質で定評のあるイギリス版オリジナル盤 (ALP) の人気が高く、軽やかな音質のフランス版 (FALP) がその後を

追う。

オリジナル盤は相対的に製造の経時的な劣化は少ないが、その一事を以て高音質と決めつけるのは合理的とは言い難く、制作者意図の反映に関しては憶測の域を超えない。経済学的に言えばオリジナル盤の価値はその希少性にある。ビートルズのアルバムやマイルス・デイビスの「カインド・オブ・ブルー」の様に販売数量が天文学的数字に達するレコードでは、相対的にオリジナルの価値が高まる。

単なる希少性は必ずしも価値と連動しないが、ローバ(lobha 貪)すなわち欠乏感に由来する欲求(=ニーズ)を基礎として、好事家のマナー(māna 慢)という心の働きを刺激し、熱狂というべき購買意欲をかき立てる。マナーは「私」という概念を規準として他社と比較する心の働きをいう。人は六処(眼耳鼻舌身意)で「私は見た」「私は聞いた」と「私」という概念を作り出す。そして「私」という概念の発生と軌を一にして他人との比較を始める。こうした自他の比較は自己愛というローバを基礎とし、仏教ではマナーをローバと同じカテゴリーにまとめる一方、ドーサ(dosa 瞋または怒り)に属するイッサー(issa[^] 嫉妬)とは区別している。イッサーは破壊力の強い不善心所ゆえマナーと比較して危険性が高い。ただしローバはタンハー(tanhā 渴愛)を淵源とし、punabbhava (puna 再び+成る bhava) という様に、人を「成る」→「消える」→「成る」→「消える」という無限のループに陥らせしめる。そしてオークションを通じてイッサーなどドーサ感情が芽生え、釈迦が戒める悪心所に陥る弊を戒めねばならない。

また現在YouTubeなどの媒体で音楽は無料で入手でき、オリジナル盤に高い対価を払う根拠の薄弱化に拍車をかけている。オリジナル盤を入手したいという欲求は所有欲と他ならない。またCDと比較して大きな盤面やジャケットの魅

力が所有欲に拍車をかける。

仏説では所有の欲求は欲愛、無有愛と並べて3つのタンハー(Tanha 渴愛)の1としている。有への渴愛、自我の存続への欲求を含む衝動といえる^{*6}。しかし仏教は「私」を単なる概念の産物(幻覚)と捉えるため、そもそも所有という事実が成立しない。商品の購買は所有という幻覚を与えるため買い手のタンハーを一時的に和らげるが、再び前述した様に「消える」→「成る」→「消える」というループが生起してやむことがない。いわゆるコレクターの心理的傾向はこの様なループを基礎し、終着点なき蒐集に勤しむ羽目となるがゆえ経済的な困窮を招きかねない。

この様にオリジナル信仰はすこぶる人間的な心理的傾向といえ、仏教的な省察と解決になじむ問題といえる。釈迦は如理作意(正しい思考)としてアッピーチャアッター(Appicchata 小欲 fewer of wishes; paucity of selfish desire)とサントウッティ(Santutthi 知足 contentment)を説き、この2つを僧侶の間で語るべき「十論事(小欲 知足 遠離 不衆会論 勤精進論 戒論 定論 慧論 解脱論 解脱智見論)」の1と2に掲げる^{*7}。

別の言葉ではネッカマッサンカッパ(nekkhammasankappa 離欲)といい、物への依存を戒め、欲と遠離した方が楽と考え、ものの過剰は苦をもたらし、欲との遠離は平安をもたらすと考える心の持ち方である。

もはやレコード蒐集やオリジナル信仰とは真逆の教えといえるが、仏教ではティーナ(thīna 昏沈)を不善心所とし、心を活発にする営みを勧める。スマナサーラ(Sumanasara, A.)は昏沈をふせぐ営為を「脳の栄養」と言い表しているが、いわゆる貪瞋痴の暴走を戒めた上で、心を活発にする趣味のたぐいならば恐らく消極的容認の範囲内と見える^{*8}。またオリジナル信仰を極北とする所有欲のメカニズムに思い至るな

*6 ポー・オー・バユットー、野中耕一訳、2012、ポー・オー・バユットー仏教事典(仏法編)、P34

*7 ポー・オー・バユットー前掲書、pp.2~3

*8 仏説に関する言説は日本テラワダ教会HPを参照した。

らば、おのずとローバやマーナの勢いは萎え、イッサーに至ることはないと思える。

以上のように昨今のアナログ・レコード人気の再燃を契機として、改めてマニアのオリジナル信仰に着目して考察を加えたが、カリスマと神話・信仰の関係の様な極めて興味深いテーマが

未着のまま終わった。今後はカラヤンやピカソなど芸術界のカリスマ、あるいはル・パンやペトリュスなどワイン界のカリスマ商品に焦点を当て、神話と象徴・信仰のダイナミズムを追いたい。